日本中國學會報　第六十一集

李漁の小説における同性愛

―眞情と禮教の角度から

蕭　涵　珍

はじめに

明末の文人たちは、柔軟さを缺きつつあった當時の禮法と教化に對して、自らの內在的な價値觀を眞の道德の基礎とするという思想を掲げ、情を崇め眞を重んじることを主張した。この考え方は、小說の編集や創作にも影響を及ぼした。白話小說集の代表作である馮夢龍の「三言」には、「眞情（眞心）ということを第一に置き、それを貫くためには、たとえ孝であっても二番目においてかまわない、という倫理上の價値判斷が働いている」という特徵があり、眞情を重視する傾向を備えている。[1] その後、明末淸初における不安定な政治情勢や社會の激しい變化の中で、「三言」を意識しながら、樣々な作品を著した李漁（一六一一～一六八〇）も、眞情と禮教の關係に關心を寄せ、作品を通して自らの思想を呈した。ある意味で、眞情と禮教は、當時の文人たちにとって重要な課題であったとも言える。

一方、明朝末期、政治の腐敗や經濟の發展、情欲の解放などによって、男色の版圖が擴大し、男子同性愛が盛んになった。皇帝が男色を好んだのみならず、男性を商品として賣る妓館にほかならぬ街中の南院の規模も、大きく發展した。[2] 男色の流行は商業出版にも影響を及ぼし、歷史上初めて男子同性愛のみを主題とした小說が出版された。[3] 明朝滅亡後も、男色の歷史が終わることはなく、むしろ益々盛んになって、男子同性愛は娛樂の一種、普遍的な社會現象になったかのごとくである。同時に、男色の盛況ぶりに對する批判も續々登場し、その社會的倫理觀や傳統的禮教に背く部分が激しく攻擊された。[4]

こうして庶民から皇帝までを卷き込んで、この時代の社會現象へと發展した同性愛は、禮法上は許されないが、眞情には背かないものとされた。正に眞情と禮教の關係を窺うのに相應しい研究對象である。そこで拙稿は、李漁の男子同性愛に關する小說である「男孟母教合三遷」（『無聲戲』一集の第六回）と「萃雅樓」（『十二樓』卷六）を材料として、彼がどのように同性愛を描寫しているのか、その描寫のしかたにはどのような考え方が內包されているのか、また、彼はなぜそのような考え方を持っていたのかなどの點について明らかにしたい。

本題に入る前に、まず「男孟母教合三遷」と「萃雅樓」の版本及びその內容を簡單に紹介する。「男孟母教合三遷」は『無聲戲小說』に收錄されている。伊藤漱平によれば、李漁は最初に『無聲戲小說』

（一集）十二篇を刊行し、翌年に『無聲戯』（二集）六篇を刊行した。その後、順治十五年（一六五八）に、一集から短編七篇、二集から中編五篇を選び、『無聲戯合集』十二篇を刊行した。また、一集と二集の残る六篇を集め、『無聲戯外集』を續編として出した。さらに康熙改元後に、『無聲戯合集』の十二篇と『無聲戯外集』の六篇を併せ、外集の「拂雲樓」を除き、新しい短編一篇を加え、杜濬の評や新たな目錄を合併し、『覺世名言連城璧』十八篇として刊行したという。また伊藤は、「萃雅樓」を收錄する『十二樓』は、順治十五年に杭州で刊行されたものであろうと推定している。[3] 拙稿では、尊經閣文庫藏『無聲戯小說』（『古本小說集成』所收影印本。上海古籍出版社、一九九〇年）と吳曉鈴藏『十二樓』（『古本小說集成』所收消閑居本の影印本。上海古籍出版社、一九九一年）を底本として研究を進めるものとする。

「男孟母教合三遷」の內容は以下のようなものである。福建興化府莆田縣の秀才許季芳は、男性の尤瑞郎を妻として迎え、二人で幸せな生活を送っていた。尤は、自分の愛情が搖るぎないものであることを證明するために、自分の意思で去勢するが、二人の愛情に嫉妬した人がその事を役所に密告したため、許は「良民を去勢させた」という罪で、棒叩き三十回の刑を受け、悔しさの餘り、病氣になって死んでしまった。尤は、許の息子があまりに美男であるため、その美貌によって受けるであろう弊を避けるために轉居を繰り返しながら、一人で許の息子を育てあげた。

この作品では、許と尤兩人の情義に關する描寫に力が入れられている。許が尤の代わりに尤の借金を返したり、尤の父親を養ったりすることばかりでなく、尤が貞節を守り、「孟母三遷」のように許の息子を教育することも描いている。また、この作品では、明末清初における福建地方の契兄弟（男子同性愛者同士が男女と同じように結婚できるという、福建地方特有の同性愛文化）という風俗についても記錄されている。

續いて「萃雅樓」の內容は以下のようなものである。明の嘉靖年間、北京順天府宛平縣の金仲雨、劉敏叔及び二人の共通の同性の愛人權汝修は、本や香料や花を賣る萃雅樓を經營していた。宰相嚴嵩の息子嚴世蕃も權汝修を氣に入り、自分の屋敷につれていこうとするが、權がそれに逆らったため、嚴は宦官沙玉成と共謀して權を去勢し、沙の屋敷で宦官として働かせる。沙の死後、嚴の屋敷に送られた權は、嚴父子の惡業を記錄しつづける。その後、嚴父子が彈劾を受けると、權はこれまで記錄した嚴父子の惡業を皇帝に上奏し、仇討ちを果たした。

どちらの作品においても、本文及び睡鄉祭酒（杜濬）の評で、それぞれ男色について論じられている。

第一節　從來の解釋

李漁の男色作品に關しては、昔から樣々な解釋がなされているが、その解釋はほぼ二つのタイプに分けることができる。一つは、本文の冒頭や末尾、及び睡鄉祭酒の評を重視し、それらは李漁の主張や文章の主旨を直接表している、という解釋である。例えば、「男孟母教合三遷」の入話の、

> 南風（男色のこと）というものは、形を論じれば過剩も不足もあまり差がなく、情を論じれば歡樂を交わしあうという趣がなく、事を論じれば子供を生むという成果がない。なぜ、何の意味もな

い、そんなものを生み出したのだろうか。他人を苦しめ、自分には益がない。そんなことを何のためにするのだろうか。[6]

や、本文の末尾の、

許季芳は同性愛者の中で最も情を重んずる人物であり、尤瑞郎は龍陽の中で最も貞節を守る人物であって、後世に名を殘すに價する。しかし、今の人はこの小説を讀むと、誰もが口を覆い隱して笑い、まるで尤瑞郎の行爲を輕蔑するかのようである。これはなぜだろうか。それはただ、このようなこと（男色）が自然の攝理ではなく、邪道を歩んだ古人が作り出したもので、そのために、最高のところに達したとしても、倫理から外れているからなのである。[7]

という內容を論據として、李漁はこの小説を通して男色の盛行を批判し、福建地方特有の契兄弟の風俗を使って、男女の區別が混亂している現狀を諷刺しているのだ、とする解釋がある。P.Hanan は、この小説の特徵は、下品な言葉使いや猥褻な描寫、同性愛を異常な行爲と規定しているところにある、と述べている。[8] また黃麗貞は、小説の結末を論據として、「李漁の目的は、世間の人々に、この倫理に反する同性愛行爲を行わないよう勸告することにある。許季芳の死と、尤瑞郎が流轉しながら一生女の役を演じることは、人間の本性に逆らう行爲である」と述べている。[9]

この解釋をとる人は、「萃雅樓」の主旨についても、睡鄉祭酒の、

總じて龍陽は自分の體を女として扱うものだから、本來持っている性器はよけいなものであって、切り取ってしまった方が都合がよい。ただし、それはその者の本意によるものでなくてはならず、例えば『初集』の尤瑞郎のごときであれば問題はない。東樓（嚴世蕃）は權の意思を無視し、勝手に去勢してしまう。殘忍にすぎると言わざるをえず、權が恨み骨髓となるのも當然である。……もし眞の奸雄であれば、金や劉にも權と同じ處置を施し（去勢し）、龍陽を圍う人によりどころを失わせることで、自分が愉快になるばかりでなく、都中の人々をして「東樓も人生に一度は人を痛快がらせることがあった」と褒めそやさせることになったはずだ。だが殘念ながら見識がそこまで及ばず、（東樓は）名聲も命も共に失い、東樓の惡となったのみであった。[10]

という評を論據として、「小説は男色を批判する姿勢を表している」と主張している。黃麗貞は「この小説は、道德や政治が衰えて混亂した世における男色の弊害を題材としている。まるで當時は誰もが男色趣味を持っていたかのようであるが、事實はそうでないことは言うまでもない」と解釋している。[11]

もう一つの解釋は、李漁の小説の本筋と、入話及び本文の末尾との間に矛盾があることを重視する解釋である。例えば李漁は、「男孟母教合三遷」の本筋では許と尤の愛情を詳しく描寫する一方、本文の末尾では、男色は倫理に逆らう行爲であるとして、世人に「このような歪んだ道を歩かず、氣力を保存して、必要なところに使うべきである」と述べている。[12] このような矛盾に對して、S.Volpp は、本文の末尾が本筋と合致していないことを率直に指摘している。[13] また王德威は、李

漁の「男孟母」は、傳統的な小説の決まりきった手法を痛烈に嘲笑し、儒教道德における矛盾を暴いているのだ、と主張している。[14]

また、吳存存は、「萃雅樓」の主旨を、金、劉、權三人の同性愛關係の肯定と、同性愛關係への迫害やそれに對する復讐を描くことにある、と見なしている。[15] Chun-shu Chang（張春樹）は、「萃雅樓」について、評者の杜濬は同性愛者に同情を寄せていないが、李漁本人は同性閒の愛情を容認且つ尊重しており、たとえ同性愛者であっても彼らなりの英雄になれる、という認識を以てこの小説を書いたのである、と述べている。[16]

これら二つの解釋には、「李漁は男色を批判している／いない」という點で、大きな違いがある。なぜこのような違いが生じるのだろうか。李漁の男色に對する姿勢を明らかにするためには、まず作品それ自體の分析に立ち返らなければならない。

第二節　李漁の意圖

作品の內容は、作家の意圖を理解するための根據であり、文章そのものはもちろん、主題の選び方や主人公の描寫のしかた、物語のどの部分にどれだけの文字數を費やしているのか、といったことにも作家の意圖が含まれる。李漁の作品に對するこれまでの解釋は、ほぼ作品の文面によってなされているが、この節では、「男孟母教合三遷」や「萃雅樓」が本當に男色を批判するものであるのかどうかについて、作品中の言葉以外の要素から分析する。

まず、男色小説という主題を見てみよう。明末の男色盛行に伴い、男色をテーマとする小説も生まれた。それらの小説は、文人から小官（男娼）まで樣々な人々や階層を描き、男色に對する批判や同情、支持などの觀點を示している。例えば『弁而釵』は、文人や良家の子弟の愛情や恩義を肯定的な手法で描寫し、男色に同情や理解を示している。また、『宜春香質』及び『龍陽逸史』は、「金の切れ目は縁の切れ目」とする小官を描寫し、商業的な男色關係を批判している。

李漁の作品では、男色反對の意圖を表現しやすい小官を主人公にしたり、南院を舞臺にしたりすることはせず、福建の米屋の息子尤瑞郎や、奸臣からの迫害に遭う權汝修といった人物を主人公としている。また、尤瑞郎の結婚相手の許季芳は、妻を亡くしており、すでに息子も儲けていた。だから二人の結婚は、「友人のために（結婚もせず、子供も生まず）祖先の血脈を斷絶させ、祖先を供養できなくなることは最大の不孝である」（『弁而釵』）[17]、あるいは「不孝には三つある。中でも、子供がないことは最大の不孝である」（『孟子』「離婁」）という常識に背いて許を世閒からの非難に晒す恐れがなく[18]、さらに「（龍陽が家庭に入ることで）香を盜み玉を取り（男女が私通し）、妻や妾と不倫の關係」（『宜春香質』）になったり[19]、家の傳統的なしきたりを破壞したりする可能性もない。萃雅樓を經營する權汝修と二人の戀人も、「金や酒があれば付き合い、金が無くなると腕をふって通り過ぎるだけ」（『宜春香質』）の關係ではない。[20] つまり、李漁は主題の選び方や主人公の描寫のしかたに留意しており、男色から起こりうる弊害を描くことを避け、主人公が世閒からの批判を受けないようにしているのである。

また、李漁の作品では、男役であるか女役であるかを問わず、同性愛者に對する批判的な描寫はない。特に、一般的な男色小説によく見られるような、受身の立場に立つ主人公への批判や、彼らが屈辱的・從屬的立場に置かれるような描寫が一切ない。そのかわりに、例えば

「男孟母教合三遷」では、受身の立場に立つ主人公尤瑞郎は、自分の意思で去勢し、女性の姿をし、許の死後は、貞操を守り續けながら許の息子を育てている。李漁は「男の孟母」を描くことで、純粋な同性愛を描こうとしたのではないだろうか。「萃雅樓」では、吳存存によると、李漁は「特に權汝修の藝術的なイメージを作り上げようと努力している。權は固く貞操を守り、强權を恐れず、貧しく卑しい境遇を耐え忍ぶ。權は目も當てられないほどの侮辱や迫害を受けながらも、それに敗北することなく、念入りに復讐の準備を進め、最後に勝利を得る。……（李漁は）同性愛者（特に受身の立場に立つ主人公）を正義の英雄として褒め稱え、蔑視することはない」という。[21] この小說では、權が身分の高い者に媚び諂ったり、戀人を裏切ったりすることはなく、神が權の代わりに復讐するなどといった非現實的な展開もない。權は自分の强い意志によって、「惡いことをすれば、惡い報いがある」、「因果應報」という結末を實現させ、輝かしい姿を讀者の前に現すのである。

最後に、兩作品で、それぞれ物語のどの部分にどれだけの行數が費やされているか、その割合を見てみよう。「男孟母教合三遷」の場合は以下のようになる。

一	入話	四七行	八・一％
二	許と尤の馴れ初めと結婚	二四七行	四二・五％
三	新婚生活と尤の去勢	九六行	十六・五％
四	密告による許の受刑と死	九〇行	十五・五％
五	尤による許の息子の養育と「三遷」	八九行	十五・三％
六	末尾における論評	十二行	二・一％

この中で、男色について論評している入話と末尾は合わせて十％强であり、タイトルと相關關係にある「三遷敎子」の部分は十五％餘りである。一方、許と尤の馴れ初めから結婚、新婚生活に至るまでの部分は五九％にも達し、特に二人の馴れ初めと結婚についての部分は、全文の四〇％以上を占める。李漁はこの物語を、二人が出會って互いに一目ぼれするところから始め、畑を賣り拂って尤の代わりに借金を返すという許の深い愛情や、尤が許を思うあまりに病氣になってしまうことまで、詳細に描いている。

このような割合から見ると、許と尤二人の强い愛情が、男色に對する批判より讀者に强い印象を與えるであろうことがわかる。もし李漁の本意が、男色の缺點を描いて世の人々を戒めることにあったのなら、このように男同士の愛情を詳細に描くことは、適當な手法ではないはずである。

また、「萃雅樓」の場合は以下のようになる。

一	入話	四〇行	七・六％
二	金、劉二人と權の男色關係	六七行	十二・八％
三	嚴世蕃の權への横戀慕	一八六行	三五・四％
四	宦官沙玉成による權への去勢	一三五行	二五・七％
五	權の復讐	九七行	十八・五％

この中では、金、劉、權三人の同性愛關係に關する內容は僅か十二・八％、權の復讐に關する內容は十八・五％にすぎないが、奸臣が法規を無視して權力によって他人を苦しめることに關する部分は六〇％强にのぼる。このような割合から見ると、「萃雅樓」の主旨は男色批判ではなく、惡德官吏の惡行や權の復讐という描寫を通しての、「惡い

ことをすれば、悪い報いがある」という主張なのではないかと考えられる。

以上の分析からは、「男孟母教合三遷」や「萃雅樓」における主題の選び方や主人公の描寫に男色そのものを批判する意圖はなく、男色行爲から起こりうる弊害（家庭倫理の破壞や散財）の描寫も避けられていることが見てとれる。また、ストーリーが進行するにつれて、主人公たちの高尚で善良な人格や意志の强さがあますところなく示され、二人の間の眞劍な愛情についての描寫も深まっていく。以上の分析から考えるに、李漁の小說に男色そのものを批判する意圖があるとは言いがたい。

それでは、男色批判の意圖を持たない「男孟母教合三遷」や「萃雅樓」が、なぜ「同性愛は倫理に反する正當でない行爲である」と主張した作品だと解釋されるのだろうか。これは、解釋する側の同性愛に對する偏見のほかに、男色に對する李漁の曖昧且つ複雜な考え方が關係しているものと思われる。李漁の考え方がいかなるものであるかを解明するために、彼の女子同性愛作品である、『笠翁傳奇十種』に收める「憐香伴」についても檢討してみたい。

第三節　女子同性愛の作品との比較

「憐香伴」は、李漁が初めて出版した戲曲である。既婚女性の崔箋雲は、尼寺で曹語花という女性に出會い、互いに意氣投合して深く理解しあう仲になったので、神前で結婚式のまねごとをして、來世で夫婦の緣を結べるように祈った。さらに、曹語花も崔箋雲の夫である石堅に嫁ぐことで、「家の中でずっと共に連れ添う」ことを約束した。しかし、曹語花の父親は、既に妻のいる石堅が、自分を騙して娘を妾にしようとしているのだと思い、結婚に反對した上、娘が崔箋雲と連絡をとりあうことも、强引に禁じる。そのため、曹語花は崔箋雲に思い焦がれるあまり、病氣になってしまう。そこで崔箋雲は、曹語花の父親が娘と詩文で交流できる友を募った機會を捉えて、それに應募して曹家に入り、計略を使って、とうとう二人共に石堅の妻及び妾になることに成功するのである。『淸稗類鈔』第七冊「甄素瓊戀紫霞而死」の女子同性愛關係についての記述の中に、「燈火の下で李笠翁の戲曲『憐香伴』を讀むと、お姉樣がまるで私の側にいるようにうっとりする」という一文があり、[22] この戲曲が二人の女性の戀愛話だと解釋されていたのは確かである。

崔と曹の愛情に關して、李漁は次のように論述している。

> 眞の美貌を持つ人は、どうして美貌を持つ人を嫉むであろうか。眞に才華のある人は、才華のある人を哀れみ惜しむものだ。物（それぞれが持つ美貌や才華のレベル）が違うと、おのずと疑い妬みあうようになる。それは自然の道理であって、不思議であろうはずがない。男の妬みは女ほど深くはないが、愛情への情熱の點でも女に負ける。女の妬みが愛情に變わると、尋常でないほどの色情となる。[23]

また、李漁は、作中で曹語花に以下のような歌を歌わせている。

> 「情癡」という二文字は、結局男性よりわれわれ女性に相應しい。世の薄情な男を笑う、世の薄情な男を笑う、中途で美人を捨ててしまうからだ。女豪傑、女丈夫の名にふさわしい人は、千里

離れていても、千里離れていても、山を超え川を渡って、ここにやって來る、私の殘り少ない生命がまだあるうちに。[24]

李漁は、「情癡」という、當時の文人たちにとって理想的と考えられた特質を彼女たちに與えただけではなく、「心から生じるものを情と呼び、しとねから生じるものは欲と呼ぶ。もししとねから生じた情によってしか相思という病にかからないのであれば、たとえその思いによって死に至ったとしても欲鬼と呼ぶだけで、情癡とは呼ばない」という言葉を通して、[25]最初から最後まで、二人の愛情の純粹さと、その價値の高さを強調している。このように、二人の女性の愛情を全く批判することのない描寫のしかたは、「男孟母教合巹遷」や「萃雅樓」とは相當に異なっている。なぜ男子同性愛よりも女子同性愛に對して寛大になりえるのか。これは二つの點から論究できる。

まず、父權制度が女子同性愛をそれほど深刻な問題とはとらえないことが理由の一であろう。戯曲の中で、曹の父親は、娘が崔箋雲を思い慕っていると召使いから聞かされても、「ばかばかしい。まさか女のために思い焦がれて、こんな重い病氣になるわけがない。あの子は、范家の女（崔箋雲）のどこが好きだというんだ」と言う。[26]石堅と崔箋雲の從兄は、崔と曹が結婚の約束をしたことを、「いろいろ面白いことをやる」とか「女たちの戯言」などと評價し、二人の愛情が本物であることには氣づかない。このように、女子同性愛に對して特に危機感を覺えなかったり、女子同性愛關係を罪のないものと單純に判斷したりする傾向は、許劍橋が指摘したように、女性と男性の肉體的な差異、卽ち女性の「男性性器の缺如」と深い關係があろう。[27]

Matthew H. Sommer の研究によると、男性性器に侵入されることは、ある意味で性や階級を支配されることであり、一種の性的な統治の象徵である、という。[28]「もしジェンダーと權力とがペニスの插入による階層制度（支配する側とされる側が生じること）に都合よく作られているとするならば、ペニス拔きのセックスは（ジェンダーと權力の）どちらも損なわないであろう」。[29]だからこそ、崔と曹の愛情は、父權社會にとって脅威にならないものと認識され、大目に見られるのである。しかし、男子同性愛の場合は違う。例えば、清代になると、男性間の强姦は異性間の强姦についてと同樣の法令によって裁かれていた。[30]そのことから Sommer は、「强姦する側が主體であり、强姦される側は男性として後退・逆轉したものと見なされる」。つまり、男性が男性に强姦されることは、“a pollution of status”あるいは“a pollution of masculine purity”（身分や地位、男性の純潔を汚すこと）であると見なされていたという。[31]李漁が、男子同性愛と女子同性愛に對して異なる態度をとったのは、そのためであろう。

また、從來の「憐香伴」に對する解釋を考えてみよう。黃麗貞は、「李漁の戯曲『憐香伴』は、昔の決まりきった型を破り、二人の女性が愛し合うことを主眼としている。…彼はこの情理に反するあらすじを通して、ものめずらしさだけではなく、嫉妬の不在という趣旨もほのめかしている」と解釋している。[32]「憐香伴」の序文を書いた虞巍も、この戯曲の內容を、李漁の睦まじい家庭環境（李漁は複數の妻妾を持っていたが、家庭は圓滿だった）と結びつけて考えている。つまり、「二人の女性が、お互いに嫉妬することなく同じ男性と結婚する」という結末によって、「憐香伴」は「良き妻妾關係」を宣傳する作品である、と解釋しているのである。[33]

女子同性愛者は、經濟的な主權を取得できず、父系且つ異性愛の體

制から抜け出すこともできないが、その體制を曹語花と崔箋雲のように利用すれば、愛情を現實のものとし、家族として生涯一緒にいることができる。しかも、「一夫多妻」の傳統に背かず、家庭を安定させる力になることもできる。これに對して、「一妻多夫」という婚姻形態は存在しえない當時では、男性同士が婚姻關係を結ぼうとすれば、片方は必ず「妻」にならざるを得ない。換言すれば、男性二人の內の一方が、男性の身分を捨てることが前提となる、ということである。このような狀況から見ると、男子同性愛は家庭倫理の維持の役に立たないだけではなく、倫理自體を破壞するものにもなる。[34] したがって、李漁は「男孟母教合三遷」や「萃雅樓」における男性同士の閒の愛情をはっきりと稱揚することはできず、曖昧な書き方をするほかなかったのであろう。

第四節　變身と去勢

李漁の「憐香伴」と、「男孟母教合三遷」及び「萃雅樓」における同性愛への評價の違いは、前述したように、「男性としての後退・逆轉」や「家庭制度の維持」と密接な關係がある。こうした點に對する配慮も、主人公たちの性別を處置する手段に影響をもたらしている。

「憐香伴」の場合、崔箋雲は、變身（男裝）を通して、男性を演じ、曹語花と婚姻の約束をし、女子同性愛關係の男役を擔い、そして再び女の身に戻って、曹語花の親に緣談を持ちかけるよう夫に勸める。つまり、「男役」は眞實ではなく僞りであるが、變身という「一時的な僞裝」による結果であって、原狀に復元できるものである。崔箋雲が女性の身分に戻っている以上、彼女の行爲は、たとえ評價はされなくても、少なくとも非難を受ける恐れはない。明清の戲曲では、こうした「ヒロインが一時的に男裝して、他の女性と婚約し、同じ男性と結婚する」というパターンがよく見られるし、[35] 岡崎由美によると、才子佳人小說でも、同じ才人を夫とする二人の佳人を描く場合、「しばしば男裝という趣向を伴い、『深窓の佳人』と『男裝の佳人』という人物描き分けのパターンを呈する」という。[36] このことは、「男裝」が當時の文人の批判の對象とはなっていなかったことを示している。李漁が「憐香伴」にこのパターンを取り入れた理由の一つは、「變身」の持つ上述したような特徵のためであろう。

また、變身とは、單なる外見の變更だけを意味するのではない。蔡祝靑の研究に基づいて考えれば、服裝という第一級の符號システムのシニフィエの變更を通して、男裝（あるいは女裝）に屬する第二級の符號システムのシニフィアン[37]も受けるということである。詳しく言えば、服裝というシニフィエは、自らのシニフィアン（第一級の符號システム）以外に、社會的な慣例（第二級の符號システム）によって、文化的な意味（主從／尊卑）をも表すものである。從って、變身とは、蔡の言うように、「個人に備わっている符號的なもの、例えば、性別や身分、地位、またそれぞれの規範やタブーなどを取り去り、文化的な符號を他のものに付け替え、その符號によって他人に識別されたり理解されたりするようになる」、ということなのである。[38]

崔箋雲は、男裝することによって、男性に付隨する文化的な意味（主、尊）も受け繼ぎ、女性の身分から男性に昇格したのだとも言える。逆に、男性が女裝することは、一種の地位的な降格とも見なされる。例えば、次のような例がある。明末の男色小說『弁而釵』「情奇記」の主人公李又仙は、匡時に恩を返すために、女性の姿をして、匡家の妾となる。匡と妻が誣告によって牢に入れられると、李は匡の子

供を連れて逃亡し、尼姿になってその子供を育てる。彼は、このようなやむをえない事情での女裝に對して、「私は男でありながら、女のようなことをしているが、このような世間が最も輕蔑し見下げることを、私は身を惜しまずに甘んじて受け入れている、これ以上恥ずかしいことがあるだろうか」と嘆くのである。[39] さらに、合山究の研究によれば、當時、女の格好をした男が婦女に近づいて强姦する、という事件が世を騒がせたので、男性の女裝は「しばしば姦淫に通じ、犯罪的であり、道德的に正常ではないとみなされた」という。[40] 元より批判の對象ではなかった女子同性愛を、李漁が男裝という手段によって表現したのは、女性の男裝にはマイナスイメージが伴わなかったからであると考えられる。

一方、一時的な變身と異なり、「萃雅樓」や「男孟母教合三遷」の主人公は去勢してしまう。物語の序盤では、尤と權は、共に生理的にも身分的にも男性のままで、同性愛關係での女役を擔っている。だが二人は、去勢した後には男性としての身分を失い、永久に原狀に戻れないまま、僞りの性で生きることになる。

先にも既に述べたように、男子同性愛の女役は「男性として後退・逆轉したもの」と見なされるため、往々にして非難を受けなければならない。たとえ女裝するだけでも、常に嚴しい非難を受けるわけであるから、まして男性の身分に戻る可能性がゼロである「去勢」は、「女裝」とは完全にレベルが異なるものだといえるだろう。

李漁が、「去勢」という過激な手段によって男子同性愛者の女役の性を處置していることは、男子同性愛者の女役とは「男性よりも女性に近いものである」ということを、眞正面から描いていることを意味している。要するに、男性が男性の性器に侵入されることは、その男性性（Masculine）が修復不可能な損害をこうむるということを意味し、女役の男性としての人格・身分を剥奪することなのである。

また、「去勢」という手段も、「男孟母教合三遷」の主人公たちの婚姻における役割を反映している。尤瑞郎は、「妻」である上、許家の一人となることによって、自らの名字や血脈を繼承する子供を得る機會をも放棄する。もし彼が、自らの血脈を繼承する子供を得たいと思うなら、許季芳の妻の座を捨てて、女性と結婚するしかない。つまり尤は、たとえ去勢しなかったとしても、許季芳と一緒にいる限り、尤家の祖先の血脈を斷絶させてしまうことになるのである。ある意味で、「去勢」は、男でありながら許家に嫁いだ尤の複雜な立場を具現化した手段だとも考えられるであろう。

結び

明清時代に男色を主題として描いた小説は少なくないが、その中でも李漁の小説に關する研究が最も多く、且つ詳細である。李漁の男色に對する態度をめぐる論の多くは、彼の曖昧な描寫のしかたを指摘している。このような曖昧さは、正に李漁が「情の價値を否定できず、それでいて從來の禮教にも逆らえないでいる」ために形成された、小說の一スタイルなのである。ここでは、拙稿のまとめとして、「眞情の重視」と「禮教の影響」、そして「獨特の描寫法」の三つの側面から、李漁の同性愛小說の特徵を簡單に整理してみたい。

第四節までの分析を通して、「男孟母教合三遷」では、男性同士の愛情の描寫がかなりの割合を占めていることがわかった。また、李漁の男色小說を明末の男色小說と比べると、彼が眞情をより重視していたこともわかる。例えば『石點頭』の主人公王仲先は、「女との密通

は甚だしく陰德を損なうが、男との戀愛は天の條理を傷つけない」と考え、[41] 女性の代わりに同窓生の潘章に手を出した。そして、ついに二人はそれぞれの家族を捨てて驅け落ちしてしまった。二人が死んだ後、彼らが埋葬された墓から連理の枝の木が生え、その枝には比翼の鳥が常に止まるようになる。一見したところでは典型的な戀愛小說であるが、考えてみると、この戀愛の始まりは不純な動機（暇潰しのために、女性の代わりに男性と付き合いたいという欲求）によるものである。一方、「男孟母教合三遷」の許季芳は元々男性が好きで、後妻に男性を迎えるつもりでいた。彼の愛情は終始變わらず眞劍なものなのである。

さらに、『弁而釵』などの男色小說は、筋を一貫させようとして、愛情の效用を過剩に强調したり、愛情の意義を取り違えて書いたりしている。それらの小說の中では、「情」とは、康正果が述べているように、「ひたすら女役に男としての性意識を放棄させ、自覺的に女としての地位を受け入れさせ、相手の思うままに支配されるように仕向けるためのものにすぎない」。[42] 例えば『弁而釵・情俠記』は、醉っ拂った武官を强姦した文人が、「愛情は同性の閒、異性の閒を問わずに存在しうる」という言い方で醉いから醒めた武官をなだめ、さらに武官を言いくるめて戀人同士になる、という話である。ここでの「愛情」は、自らの行爲を正當化するためのものになってしまっている。

これに對し、李漁は同性同士の感情や交流に關する描寫を重んじ、「情意、多情、情種」などという言葉に、確かな實體を與えている。また、李漁は『閑情偶寄』でも、女色と男色を竝列し、それらは共に命を救える藥である、と見なしている。李漁は、同性同士の愛情をある程度理解し、肯定していることがわかる。

また、『弁而釵』や『宜春香質』をはじめとする明末の男色小說のほとんどは、讀者の男色に對する好奇心を滿足させるために創作された、商業的な作品である。そのため、主人公たちのセックスについての內容は少なくとも一千字、多い場合は四～五千字以上になる。特に惡玉の場合には、彼らの大仰なセックスや厖大な情欲を露骨な言葉で描いている。一方、李漁の「男孟母教合三遷」での許と尤の肉體關係に關する描寫は、結婚式の夜を描く三首の「撒帳詞」だけであり、合わせて百字に滿たない。「萃雅樓」での性的描寫はさらに少なく、金、劉、權三人の男色關係に關する內容は「玩賞後庭花（後庭花を味わい、樂しむ）」という五字だけであり、嚴世蕃の男色趣味についても、「彼は從來から男色の弊があり、北京城內のきれいな龍陽は一人も彼の網の目から逃れることができない」と記しているだけである。[43] このような描寫の差から、李漁の男色小說は、猥褻な內容を賣り物にしたり、珍奇なものを寄せ集めたりした作品ではないことがわかる。彼の作品は、眞情を重視したより上品なものであり、讀者のレベルも、同時代の男色小說より高かったものと推測される。

さらに、男子同性愛に對する李漁の態度が曖昧であることは、彼が傳統的な禮法から影響を受けていたことを、よく反映している。男子同性愛は家庭倫理の維持には役に立たない上に、「男性として後退・逆轉したもの」である。實は、傳統的な禮教に對する李漁の配慮も、「萃雅樓」や「男孟母教合三遷」を讀む人の反應を氣にかけていたことと關係している。新奇な內容は好評を得られるが、儒家の倫理道德に背く內容は、文人からの批判や指摘の對象になる。そこで、作品中で禮教に反する思想を公然と主張することは避けた上で、非難を受けにくい主題や、高尙な人格を持つ主人公を選び、同性愛者の眞情を婉

曲な手法で表現するのが、小説の書き方として最も無難なものだったのだと思われる。

最後に、李漁獨特の物語の描寫法を見てみたいと思う。彼は、主人公の一見眞っ當な行動や臺詞の裏に、常に捻じ曲がった理屈や滑稽な結末を用意しているのである。

例えば、「男孟母教合三遷」の場合は、尤瑞郎の父親は、息子が許季芳からもらった結納金によって、借金を返濟して亡き妻を埋葬することができ、「息子がいるだけで、萬事足りる」と言って感激する。しかし、尤瑞郎は家系を存續させたり祖先を供養したりする役目を負う「息子」でありながら、許季芳と結婚した上に自ら去勢し、祖先の血脈を斷絶させてしまった。結局、彼は「息子」としての責任から逃げて、「娘」のような存在になってしまうのである。尤瑞郎の存在は、尤の父親を、妻の墓所さえ買えない貧困生活から救い出したかわりに、尤の父親とその祖先を、供養する子孫がいなくなるという境地に追い込んだ。「息子がいるだけで、萬事足りる」という感激の臺詞は、後の話の展開を嘲弄する言葉となってしまったのである。

また、「萃雅樓」では、權汝修は嚴世蕃の招待を斷る時、「烈女は二人の夫に仕えないというが、男の私が、どうして三人に仕えることができようか」と言っている。「烈女は二人の夫に仕えない」という理念は「貞節」の排他性や唯一性に相應しいのであるが、「どうして三人に仕えることができようか」という權汝修は、そもそも二人の戀人を持っているのだから、實は本來の貞節からは外れている。さらに、李漁は男性に「孟母三遷」の美談を演じさせている。このような、傳統を模倣しながら傳統を揶揄するという手法は、固定化した既成概念（息子の役割／貞節／賢母）を打破し、柔軟な發想を通して、深刻な主題を面白いものにしており、李漁の複雑な考え方を呈しているのみならず、彼獨特の風格や價値觀を形成しているのである。

李漁以前の同性愛小説は、男色を一種の流行として創作に取り入れたものであって、小説としての枠組みや內容も工夫されていなかった。『弁而釵』は傳統的な「才子佳人」の枠組みを踏襲し、「男が妓館へ行く」という筋を「男が南院へ行く」に置き換えているだけであるし、『宜春香質』は大量の性描寫によって讀者を引きつけようとした作品にすぎず、『龍陽逸史』は、物語性よりも教訓的意圖を重視した作品である。これらの小説は、確かに歷史的には價値があり、當時の社會の氣風を理解するための重要なテキストにはちがいないが、文學作品としては、まだ物足りない部分が相當にある。

また、理想的な男子同性愛の世界を描いた淸の道光年間の『品花寶鑑』は、舊來の戀愛小説から多くの要素を取り入れたために、かえってキャラクターの形象が薄くなり、文章も藝術性に乏しいものとなっている。袁枚の『續子不語』「多官」は、男子同性愛者の深い感情を描寫しているが、長さは一千字程度で、ストーリーも單純であり、作者の豊かな思想がこめられた作品とは言い難い。複雑な意圖を含み、巧妙な筆致で書かれた李漁の同性愛小説は、明淸の同性愛小説の中で、最も高い文學的價値を認められる作品と考えられるのである。

注

（1）大木康「馮夢龍「三言」の編纂意圖について（續）：眞情より見た一側面」（『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』、一九八六年）、六三一頁。

（2）皇帝が男色を好んだことに關して、沈德符の『萬曆野獲編』「十俊」には、「今の天子（明神宗）は、壬午年（萬曆九年）と癸未年（萬曆十

年）以來、若い宦官の中で、聰明且つ見目麗しい者十名あまりを選んで天子の側に仕えさせているが、天子の恩寵を受けて起き臥しを共にする者もある。宮中の人は皆彼らを十俊と呼んでいる。」（原文：今上壬午癸未以後，選垂髫內臣之慧且麗者十餘曹，給事御前，或承恩與上同臥起，內廷皆目之爲十俊。）とある。（中華書局、一九八〇年）、五四八頁。

（3）『宜春香質』、『弁而釵』、『龍陽逸史』の三作品がそれである。これらの小説は李漁の作品より古く、明末崇禎年間に出版されたものと推定される。なお、『宜春香質』、『弁而釵』については、筆者が臺灣政治大學に提出した修士論文「明末男色小説：『宜春香質』、『弁而釵』」（二〇〇四年）で論じている。

（4）例えば、顏茂猷の「遏淫說」（『藏外道書』第二七集、巴蜀書社、一九九四年）には「少年を姦淫することは、自分の子や孫を姦淫するのと何ら變わらない。青年を姦淫することは、自分の弟や甥を姦淫するのと何ら變わらない。」（原文：淫其幼者，何異於吾子吾孫。淫其稍長者，何異於吾弟吾姪。）とあり、傳統的禮教において重視される「君子は君子として、臣下は臣下として、父親は父親として、子は子としてそれぞれの本分を盡くす」（原文：君君，臣臣，父父，子子）（『論語』「顏淵」）という倫理觀が、男色によって亂されることを批判している。

（5）伊藤漱平「李漁の小説の版本とその流傳―『無聲戲』を中心として」（『日本中國學會報』第三六輯、一九八四年）及び同『連城璧（下）』「解題」（佐伯文庫叢刊、汲古書院、一九八九年）、同「李漁の戲曲小説の成立とその刊刻」（『二松學舍大學大學院紀要』（一）、一九八七年）による。

（6）原文：南風一事，論形則無有餘、不足之分，論情則無交歡共樂之趣，論事又無生男育女之功，不知何所取義，創出這樁事來？有苦於人，無益於己，做他何用？

（7）龍陽は同性愛者、また同性愛行爲を指し、ここでは特に同性愛行爲の中で受身の立場に立つ役を指す。原文：這許季芳是好南風的第一個情種，尤瑞郎是做龍陽的第一個節婦，論理就該流芳百世了；如今的人，看到這回小說，個個都掩口而笑，就像鄙薄他的一般。這是什麼原故？只因這樁事不是天造地設的道理，是那走斜路的古人穿鑿出來的，所以做到極至的所在，也無當于人倫。

（8）Patrick Hanan: *The Invention of Li Yu* (Harvard University Press：Cambridge, 1988)，P97。原文：Several tones are to be heard in this story: ribaldry, expressed mainly in poems; sensuality, as in the description of the boy baring his buttocks in court; and calm discursiveness, as in the argument that homosexuality is an abnormality in terms of anatomical complementarity, natural feeling, and effect.

（9）黄麗貞『李漁研究』（國家出版社、一九九五年）、三七六頁。

（10）原文：凡作龍陽者，既以身爲妾婦，則所存之人道原屬贅瘤，割而去之，誠爲便事。但須此童自發其心，如初集之尤瑞郎則可。東樓不由情願，竟尔便宜行事，未免過于殘忍，無怪小權之切齒腐心。…若使眞正奸雄，必以處小權者處金、劉，使據有龍陽之人頓失所恃，不特自快其心，亦可使傾都人士頌德歌功，謂東樓一生亦曾做一樁痛快人心之事。惜乎見不及此，而使名頭俱喪，成其爲東樓之惡而已矣。

（11）黄麗貞『李漁研究』（國家出版社、一九九五年）、三四二頁。

（12）原文：（我勸世間的人，）斷了這條斜路不要走，留些精神施於有用之地。

（13）Volpp Sophie：*The Male Queen: Boy actors and literati libertines* (Harvard University, 1995), P182。原文：Paradoxically, the chaste boy himself represents an inversion of order. The prologue and the conclusion to the story tell us that sex between men is polluting and disorderly. Yet the figure of You Ruilang (尤瑞郎：蕭補) rebuts those concerns.

（14）王德威『想像中國的方法』（三聯書店、二〇〇三年）、二五頁。

(15) 吳存存『明清社會性愛風氣』(人民文學出版社、二〇〇〇年)、一九八頁。

(16) Chun-shu Chang, Shelley Hsueh-lun Chang : *Crisis and Transformation in Seventeenth-Century China* (The University of Michigan Press : 1992)。原文：He recognized and respected the affectionate ties between homosexuals. Not many people in Li Yü's (李漁：蕭補) days shared Li Yü's compassion for homosexuals.… This irrational attitude of hostility against Ch'üan's (權汝修：蕭補) innocent lovers makes it clear that Tu Chün (杜濬：蕭補) had no feeling for the homosexuals. (P257-P258) 原文：In spite of the low opinions of beggars and homosexuals held by Li Yü's contemporaries, he insisted that they could be heroes in their own way. (P245)

(17) 西湖醉心月主人『思無邪匯寶 弁而釵』(大英百科出版、一九九五年)、二五一～二五二頁。原文：爲朋友而絕祖宗血食、大不孝也。

(18) 原文：不孝有三、無後爲大。

(19) 『宜春香質』「花集」には、女役である單秀言が愛人の鐵一心の妾や召使と姦通し、さらに鐵一心の財産を横領するという箇所がある。

(20) 西湖醉心月主人『思無邪匯寶 宜春香質』(大英百科出版、一九九五年)、一六一頁。原文：有錢有酒相隨、財盡掉臂矣。

(21) 吳存存『明清社會性愛風氣』(人民文學出版社、二〇〇〇年)、一九八頁。

(22) 原文：挑燈讀李笠翁「憐香伴」之劇、則恍惚姊猶徘徊吾左右。

(23) 原文：眞色何曾忌色、眞才始解憐才。物非同類自相猜、理本如斯奚怪。奇妒雖輸女子、癡情也讓裙釵。轉將妒痞作情胎、不是尋常癡派。

(24) 原文：「情癡」兩字、畢竟輸我輩裙裾。笑世上薄幸男兒、笑世上薄幸男兒、半路把紅顏丟負。不枉了閨中豪傑、女中丈夫。遠隔著千山萬水、遠隔著千山萬水、跋涉前來、還趁我殘生未殂。

(25) 原文：從肝膈上起見的叫做情、從衽席上起見的叫做欲。若定爲衽席私情才害相思、就害死了也只叫做個欲鬼、叫不得個情癡。

(26) 原文：豈有此理。難道爲個女人、就想成這等大病。他愛范家女子哪一件。

(27) 許劍橋「李漁『憐香伴』中女同性愛的完成」(臺灣中央大學主催、第九回「全國中文所研究生論文研討會」での發表論文、二〇〇二年十一月二九日)。

(28) Matthew H. Sommer : *Sex,Law and society in Late imperial China* (Stanford University press : Stanford,2000), P163。

(29) Matthew H. Sommer : *Sex,Law and society in Late imperial China* (Stanford University press : Stanford,2000), P163。原文：If gender and power were keyed to a hierarchy of phallic penetration, then sex without a phallus would seem to undermine neither.

(30) 『大清律例』「刑律條例」には、「惡徒及びその一味が、良民の男性を略取して强姦した場合には、被害者を殺害したか否かにかかわらず、光棍例（やくざの處置法）に從い、主犯を卽時斬罪に處する。共犯者で同じく被害者を强姦した者は絞首刑に處し、處刑まで獄に拘禁する。他の共犯者は黑龍江に追放し、兵士の奴隸とする。」(原文：惡徒夥衆將良人子弟搶去、强行雞姦者、無論曾否殺人、仍照光棍例。爲首者擬斬立決、爲從者若同姦者俱擬絞監候。餘犯發遣黑龍江、給披甲人爲奴。) とある。この刑罰は、同書において、良民の女性が强姦された場合の「主犯を卽時斬罪に處する。共犯者で同じく被害者を强姦した者は絞首刑に處し、處刑まで獄に拘禁する。犯行に關わったが强姦はしていない者は黑龍江に追放し、兵士の奴隸とする。」(原文：一輪姦良人婦女已成之案審實、照光棍例、爲首擬斬立決、從同姦者擬絞監候、同謀未經同姦餘犯改發黑龍江、給披甲人爲奴。) と同じである。

(31) Matthew H. Sommer：*Sex,Law and society in Late imperial China* (Stanford University press：Stanford,2000), P129-130°

(32) 黄麗貞『李漁研究』(國家出版社、一九九五年)、二六五頁。

(33) ただし、この解釋では、作中に曹語花と崔箋雲の深い愛情が描かれていることや、逆に曹語花と石堅が接觸する場面がほとんどないことについては問題としていない。

(34) もし、當時「一妻多夫」という婚姻形態が存在したのであれば、男性同士の戀愛は、嫉妬による家庭爭議を防ぎ、家庭倫理の維持の役に立つことになる。しかし、この制度が現實には存在しなかった以上、そのような效用も當然存在しない。また、男妾が原因で「一夫多妻」の家庭が破壞されるという狀況については、「男孟母教合三遷」や「萃雅樓」にはそのような例がないので、本論では詳しくは論じないが、「男妾と夫の妻妾との不倫」や「夫が男子同性愛にふけって寂しい思いをするようになった妻妾の不倫」といった危機は、現實にも、男妾を扱った他の文學作品にも、實例がある。

(35) 例えば、明・沈君謨の『風流配』や明・尤燮の『江花夢』などがある。しかし、「憐香伴」のように女性同士の愛情を詳しく描寫したものはない。

(36) 岡崎由美「明代傳奇における才子と佳人―一夫兩妻の趣向をてがかりに―」(『中國詩文論叢』第一四集、一九九五年)、一三二頁。

(37) 言語學者の Ferdinand de Saussure は、言葉の要素をシニフィアン (signifiant) とシニフィエ (signifié) に分けている。前者は指摘される對象 (客觀的な存在) であり、後者は文字や音聲、圖像のようなものを指す道具である。

(38) 蔡祝青「明末清初小說中男女扮裝之性別與文化意義」(南華大學文學研究所修士論文，二〇〇一年)，五四頁。原文：「扮裝」的意義即是撤換掉原本加諸個人的符號系統，如性別、階級、身分地位與隨之而來的處世規範與禁忌等等，而扮裝後即意味穿戴上了另一套文化符碼以供他人辨認、解讀…。

(39) 原文：我本男子，乃行女人之事，人世所極鄙薄輕賤者，我不惜一身任之，恥孰甚焉。

(40) 合山究『明清時代の女性と文學』(汲古書院、二〇〇六年)、七七九頁。

(41) 天然癡叟『石點頭』(上海古籍出版社、一九九四年)、九三五頁。原文：偷婦人極損陰德，分桃斷袖，却不傷天理。

(42) 康正果『重審風月鑑』(麥田出版社、一九九六年)、一四二頁。原文：(所謂泯滅男女之分，) 不過是盡量說服被動的一方放棄身爲男人的性別意識，自覺接受女人的身份，由對方任意擺佈罷了。

(43) 原文：東樓素有男風之癖，北京城內不但有姿色的龍陽不曾漏網一個…。